

新島襄と京都府政の人々

— 大学設立募金運動をささえた人脈 —

高久 嶺之介

はじめに

最初に申しあげておきますが、私の専門分野は京都府や滋賀県を対象にした日本近代地域史で、とくに新島襄、あるいは同志社について詳しいわけではございません。先ほどこの会場を見回したところ、私よりも詳しい先生方が何人かいらっしやっております。ただ、私自身は、新島が生きた時代の京都というものについて、少しばかり勉強しているということでございます。それから、先ほどご紹介ございましたけれども、私は、三一年間、人文科学研究所の教員で、二〇〇七年に京都橘大学に移りました。今度は、外の目で同志社や新島襄を見ることになったわけです。外の目から見たら、同志社の歴史の特徴は何なのか。結論的に言いますと、創立者が政治家ではなくて教育者で、しかもその人物が高校の教科書にも登場する有名人で、人間的にもかなりおもしろい人物であるということです。どういう点がおもしろいかは後で述べます。ともあれ、そういう創立者を持っている大学というのは、他の大学に移ってみるとうらやましい、そういう感じをしております。

私自身は、先ほど新島襄について素人だというふうに申し上げましたけれども、少しでも、少しでも新島について書いた

ものがございます。一つは「新島襄と自由民権家の群像」（学校法人同志社編『新島襄―近代日本の先覚者』晃洋書房、一九九三年）。それから、もう一つは、「新島襄と北垣国道」（伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房、二〇〇二年）。さらに、「田中源太郎と新島襄」（『同志社時報』九四号）という小文も書いています。これらの拙稿と、今回の展示された新しい資料（二〇一五年四月二一日～六月二一日に開催された同志社創立一四〇周年記念「はじまりの地―ラットランドから寺町丸太町、今出川へ」展示資料、同名の図録に収録）も一部取り入れまして、今日はお話をさせていたただきたいと思えます。

中心的に話をするのは、一八八三年（明治一六）頃から新島がもつとも京都の人たちと関わり合った運動、すなわち大学設立募金運動についてです。この運動で、新島は京都の人々、とりわけ政財界の人びととかかわっていくこととなります。その多くは、非キリスト教徒で、とりわけ重要な役割を果たすのが府会議長田中源太郎と京都府知事北垣国道です。彼らはなぜどのようにして新島の運動に協力していったのか。また、大学設立募金運動の展開の中で、新島は、中央の政治家、井上馨・陸奥宗光・大隈重信らに協力を仰ぐこととなります。この中央政治家との関わり方はどのような特徴があったのかについて話をさせていただきます。そして最後に、大学設立募金運動から見える私なりの新島襄のおもしろさを論じてみたいと思えます（なお、この話は杉井六郎先生らの先行研究、たとえば『同志社百年史』通史編Ⅰなどを前提にしています）。

I 同志社の場所

大学設立募金運動の話の前に、今回の展示が「はじまりの地」ということですので、同志社が始まった地、寺

町丸太町、烏丸今出川について、少し気が付いたことを話をしておきます。第1図は、慶応三年（一八六七）二月九日の王政復古の号令の時点での御所と公家町を記した絵図です。右上、すなわち寺町丸太町のところに「中井」という家の名前がありますが、ここが、一八七五年（明治八）一月に同志社が開校した場所になります。これについては、展示の図録が詳しい解説を書いています。図録によれば、この場所は、もともとは信行寺というお寺であったところのようです。このあたりは「寺町」ですから、お寺がいっぱいあったわけです。ここで注目されるのは、寺町通という通のことです。一八八九年（明治二二）、当時の北垣国道府知事が語ったところによると、京都市中で道幅がもっとも広がった通は三条通と寺町通で大体四間（約七・二メートル）程度でした。現在烏丸通も今出川通も一〇メートル以上の道幅ですが、これは明治末から大正初期の道路の拡幅によって広がった通で、もともとは寺町通よりも道幅は狭かったのです。まず、風景として、最初に、同志社が開校した場所というのは、そういう京都市中でも三条通と共にもっとも広い道幅の場所であったということを指摘しておきたいと思います。

一八七六年（明治九）には、同志社は今の薩摩屋敷のところに移るわけです。今出川の地です。この絵図では、右下のところに「薩州屋敷」とあります。そしてその南（絵図では右）の今出川通に面したところに、西（絵図では下）から「竹内殿」「徳大寺殿」「藤谷殿」「冷泉殿」「山科殿」と公家の家が並んでいます。この内現在残っているのは冷泉家だけで、他の四つの家のところは現在同志社の所有地です。同志社がこの地に学校を建築し始めたのは一八七六年六月ですが、この年五月の宮内省の調査では、徳大寺家という清華家の家を除けば、竹内・藤谷・冷泉・山科の四つの家はまだ京都に残っていたようです。そのことは刑部芳則さんの『京都に残った公家たち 華族の近代』という本で明らかになっています。刑部さんの研究では、この時五六の公家がまだ京都に残っ

ていたようです。冷泉家を除く竹内・藤谷・山科の三つの公家の家がいっこの地から離れたか非常に興味がありますが、そのことを示す史料が欲しいところです。このような史料は何とか探し出せるような気がします。

II 大学設立募金運動の前期

① 大学設立募金運動の端緒

大学設立募金運動は日本での具体的な動きのはじまりは、すでに指摘されています。つまり、一八八一年（明治一四）一〇月中旬、奈良県吉野郡の山林王土倉庄三郎が立憲政党新聞社の古沢滋とともに新島を訪問し、子息二人の教育を依頼し、その際新島は大学設立の計画を述べ、土倉はかれの計画に賛同し、経済的援助を約束したということです。翌年、一月、新島は、大阪より御所ごせに行つて、御所から大風雪にあいながら吉野郡大滝村（現奈良県吉野郡川上村大滝）の土倉邸を訪問し、同志社大学法学科設置のため五、〇〇〇円の寄付をとりつけます。史料で見ると簡単そうに見えるのですが、まず、この一事をもつてしても、新島のこの運動への本気度の凄さを感じます。私もこの土倉の生地に行つてみたことがあります。新島の時代はもちろん鉄道などありません。御所から、ずっと歩いていく。一月ですから、風雪の中を行くわけです。執念を感じます。吉野川の近くですが、今は土倉の家はなくなっております。

② 田中源太郎の獲得

では、最初の運動である京都における大学設立募金運動はどのようにして行われるのか。別の表現で言えば、

新島は京都においてどのような形で金を集めようとしたのか。京都府会というのが一八七九年（明治一二）からできていましたが、その京都府会の連中を、まず束ねていくというやり方を新島はいたします。そのときに、束ねるといった場合に、誰を中心に持つてくるかというところ、京都府会議長の田中源太郎という人物です。田中源太郎は京都政財界の中心人物で南桑田郡亀岡町の出身です。一八八〇年（明治一三）に府会議員に当選し、一八八二年（明治一五）から一八九〇年（明治二三）まで京都府会のトップにある府会議長をつとめ、一八九〇年から一八九四年（明治二七）までは衆議院議員（当初は大成会、のち無所属）。一八九七年（明治三〇）から一九一八年（大正七）までは多額納税者の貴族院議員をつとめます。そして明治二〇年代から三〇年代は京都府下きつての大地主であるとともに、明治一〇年代後半以降は京都商工銀行はじめ諸会社の役員を歴任する実業家でした（『田中源太郎翁伝』、『京都府議会歴代議員録』）。非キリスト教徒であり、一八八三年（明治一六）まで新島襄との接点を直接的には持たない人間でした。この田中源太郎を募金運動の発起人の一人になつてもらい、京都府会議員の獲得という方法が新島周辺で考えられた方法でした。京都府会議員は、当時九〇名ほどで上・下京区と郡部一八郡から選出されており、府会議員と京都府との意見の調整役として府会議員から選ばれた一〇名の常置委員（区部五名、郡部五名）がおりました。常置委員というのは、地方税（府県税）をもつて支弁すべき事業を執行する方法順序について、その都度府知事・県令の諮問を受けその意見を述べるという重要な役職でした。

田中は獲得するには、山本覚馬から浜岡光哲へ、そして浜岡からいところである田中源太郎へ、というのが当初考えられた方法であつたと思います。浜岡光哲についても触れておきましょう。浜岡は、上京区選出で府会区部会の副議長（一八八一〜一八八三年、一八八六〜一八八七年）をつとめ、京都商工会議所（一八九一年より京都商業会議所になる）のトップ（会長・会頭）を一八八四年より一九〇一年までつとめた政財界の実力者です。『中

外電報』、『京都日出新聞』の経営者でもあります。一八七四年頃に山本覚馬に私淑します（『浜岡光哲翁七十七年史』）。また、後で話をします北垣国道京都府知事とも親しく、実は京都府知事北垣の日記『塵海』中に、民間人でもっとも登場頻度が多いのが浜岡です。

ただ、いとこと言っても、田中源太郎と浜岡光哲では性格に大きな違いがありました。たとえば、『田中源太郎翁伝』では、両者の性格の違いを次のように表現しています（三二二頁）。

両者の性格は全く相異なり、田中翁の細心周密、計数の才に長じ、飽までも現実に立脚した実行主義者であったのに反し、浜岡翁は放胆にして鷹揚、現在に拘泥せない理想主義者であった。この相反せる性格が、反つて長短相補ひ、有無相通ずるの妙機を生み、一事を成し、一業を起すに当たつては、田中翁は内に、浜岡翁は外に、恰も女房と亭主の如き役割を演じ、共に無くてはならぬ大切な両柱となつて、互に苦を分ち、樂を共にし來つたのは、奇しくも亦床しき因縁である。

このような慎重な性格の田中を、新島は京都の大学設立募金運動の中心人物にすることはなかなかできなかったようです。

たとえば、一八八三年七月二〇日、新島は、田中源太郎へ手紙を出します。この内容は、新島と浜岡との親しい関係にも触れながら、是非大学設立募金運動に加わっていただきたいという非常に丁重な形の文です（『新島襄全集』（以下『全集』と略す）第三卷、二四〇～四一頁）。

同年一〇月一日、さらに新島は、田中源太郎へ手紙を出します。その内容は、近々發起人集會を開くので、是

非発起人に加わっていただけというものです（『全集』第三卷、二四五頁）。新島は、この頃浜岡光哲と協議したうえで、京都府会の郡区の常置委員を発起人とする意向でしたから（『全集』第一卷、一八六頁）、発起人会議を招集する際にどうしても府会議長である田中の名が欲しかったのです。

翌一〇月二日付で、田長源太郎より新島へ返信が届きます。しかし田中の返事は新島の期待を裏切るもので、「法律専門校」の設立発起人になることを辞退し、普通の賛成者のなかに入れてくれるように要請するものでした（『全集』第九卷（上）、一一八頁）。あきらめきれない新島は、一〇月四日またもや田中源太郎に書簡を送り、再度発起人に加入することを訴えます（『全集』第三卷、二四六頁）。このあたりの新島を見てみると、ともかくなりふりかまわずに執拗に田中獲得にこだわっています。結局のところ、一〇月四日、大学設立発起人加盟の依頼書は、田中源太郎を外し、山本覚馬・浜岡光哲・中村栄助・新島襄の四人の連名で京都府区部常置委員に送付されることとなります（『全集』第一卷、一八六～一八七頁）。

一〇月二日、新島は、京都市中で田中源太郎に会って話をします。この席で田中は発起人辞退の理由を述べますが、「同志社大学創立記事」の中に次のような一節があります（『全集』第一卷、一七八頁）。

近來米価地価ノ下落ト加之当夏ノ旱魃ヲ以テスルヨリ村落ハ非常ニ困却、随不景氣不融通ヲ醸シ、到底此ノ
実況ナルレハ賛成家ヲ得ルニ見込ナケレハ、此レ時機ノ未タ至ラサルナルベシト思ワレ断然発起人加名ハ辞
シ度ト云レタリ

これは、当時の事情を考えると、田中の言うとおりで。この一八八三年（明治一六）という年は、明治期最

大の大旱魃の年なんです。私は、滋賀県の地域史も研究していますが、滋賀県内のある史料では、七月から七八日間、つまり二カ月半雨が降らない、と書いてある。したがって、米が採れない。要するに、新島襄が募金運動を始めたころの時期というのは、よく松方デフレという言葉でこの時期の不景気を言いますが、それだけじゃなくて大災害が頻発した時期だったのです。一八八三年は今いったように明治期の最大の旱魃の年です。一八八五年（明治一八）は水害の年です。一八八九年（明治二二）というのも、これも大水害の年です。そのように新島が大学設立募金運動を展開した時期は、自然災害と不景気が合わさって地域はものすごく苦しい時期なんです。一八八三年から翌年にかけて、地租延納願という、つまり「地租を払えないので、ちょっと延ばしてくれ」というような史料が、京都府でも、滋賀県でも、いっぱい出てくる時期です。だから、田中は「私は、発起人はやらない」と固辞します。

新島はそれでもあきらめない。田中に会った夜、新島は、三丹地方巡回から戻った中村栄助に田中の件を相談し、中村より京都商工会議所会頭高木文平に相談してはと勧められます（『全集』第一卷、一七八頁）。翌二日朝、新島は浜岡光哲の家に立ち寄って後、高木文平を訪問し、田中を翻意させる方法を尋ねます。高木は一応田中に面会することを約束し、再三頼んで応じなければ止むを得ない、応じたものだけで発起人とし、募集方法を定めて賛成者を募るしか方法はない、と新島に答えたようです（『全集』第一卷、一七八―七九頁）。高木文平とはどんな人物か。この人は、京都府官僚を経て北桑田郡選出府會議員（一八八〇―八一年）、その後下京区選出府會議員（一八八四―一八九〇年）、一八八二年から一八八五年まで京都商工会議所初代会長をつとめます。当時の北垣府知事を助けて琵琶湖疏水事業に尽力します（『京都府議會歴代議員録』、高木誠『わが国水力発電・電気鉄道のルーツ』）。この一二日の二日前の一〇月一〇日に発起人になることを承諾したばかりでした。

高木がどのように田中につけあつたかは不明です。「同志社大学記事」は「而シテ其後二至リ漸ク発起人中二列加セリ」とのみ記しています（『全集』第一巻、一八三頁）。おそらく、その後高木・浜岡らが田中を説得し、翻意させることに成功したのだと思います。この田中工作の過程の史料に中村栄助は登場するが、山本覚馬は一切登場しません。田中源太郎も、山本覚馬の教えを受けているのですが、田中が教えを受けたのは山本覚馬だけではありません。よく、同志社を支えた京都人脈を山本覚馬の教え子のように言ったりする場合もあるようですが、それは山本覚馬の過大評価だと思います。山本は、一八七九年に創設された京都府会の初代議長ですが、影響力があつたのはごく府会の初期だけで、長く京都府会に影響力を持つわけではありません。山本をあまり過大評価すると、田中源太郎や浜岡光哲などの役割を過小評価することにつながると私は考えています。

このように田中獲得に成功した後、一八八四年（明治一七）四月一日、京都商工会議所で大学設立について京都府下「名望ノ士（多クハ府會議員）」七〇余名の会合が開かれます。この時司会をしたのが田中源太郎です（『全集』第一巻、一九一〜九三頁）。そして、翌四月二日、前日に続いて京都商工会議所で相談会を開き、二二名が出席します。ここで綱領・仮則・募集金仮則を決定され、校名は「明治専門学校」、募集金総額は七万円とされます（『全集』第一巻、一九二〜九三頁）。これらのことについてはすでに先行研究で書かれています。四月四日には、専門学校発起人により一四人の役員（理事委員）が選定されます（『全集』第一巻、一九二頁）。

〔京都府下区部理事委員〕 浜岡光哲、中村栄助、高木文平、市田文次郎、西村七三郎、内貴甚三郎、竹鼻仙
右衛門

〔京都府下郡部理事委員〕 松野新九郎（愛宕郡）、田中常七（葛野郡）、正木安左衛門（乙訓郡）、同志社大学

「記事」には「安右衛門」と記載間違いをしている、高久注)、菱木信興(紀伊、久世郡)、吉井省三(宇治郡)、伊東熊夫(綴喜、相楽郡)、田中源太郎(南桑田郡)、河原林義雄(北桑田郡)、奥村新之丞(船井郡)、福井矢之輔(何鹿郡)、田中喜間太(天田郡)、今林則満(与謝郡)、足達又八郎(竹野郡)、稲葉市郎右衛門(熊野郡)

注目すべきことは、全員が京都府会議員および府会議員経験者で、しかも常置委員が数多く占めるということです。新島が京都府会議員を中心に大学設立募金運動を実施しようとしたのがよくわかるとともに、田中源太郎獲得にいかにかこだわったのがあらためてよくわかります。

この日、四月四日の夜、田中源太郎、浜岡光哲、高木文平の三人が、新島夫婦と山本覚馬夫婦を招待し、祇園中村楼で日本食の会食をします。これは新島の二度目の外遊の送別会でした。新島の日記には、次のように書かれています。「此三氏ノ如キハ」、つまり、田中、浜岡、高木のことですが、「今回専門校ノ談判ニ至リ実ニ柱石ト云ヘキモノナリ。浜岡氏ナカリセバ争テ田中氏モ之に応スベケン、田中氏ノ奮発ト周旋ナカリセハ争デカ府会ノ人ヲシテ之に応セシムベケン、又高木氏ノ果断克ク田中氏ヲ翼賛スルナクンハ、田中氏モ亦焉ソ如斯ク速ニ成功ヲ見ルヲ得(ベ)ケン」(『全集』第五卷、三二〇頁)。

Ⅲ 大学設立募金運動の後期―全国的展開と京都府知事北垣国道の全面的協力

①新島の帰国と一八八六年・一八八七年の動き

新島が帰国するのは一八八五年（明治一八）一二月で、一年八か月ぶりの帰洛です。一八八六年―一八八七年に大学設立募金運動に目立った動きはありませんが、次の二点が注目されます。一つは、一八八七年（明治二〇）二月、新島が北垣国道京都府知事の息子^{かたし}確の教育を請負うという事実です（『全集』第三卷、四四八頁）。府知事の息子の教育を新島がひきうけたということは、新島と北垣の接触の度合いを強めたということですが（北垣の息子の教育はなかなかうまくいかなかったようで、熊本の海老名弾正に預けたりしますが）。もう一つは、この年の六月一三日、新島は、北垣の紹介により横浜正金銀行頭取原六郎（北垣とは但馬青谿書院の同門）に接触し、大学設立のための寄付金応募の約束を取り付けたという事実があります（『全集』第三卷、四七〇頁、『塵海』明治二〇年六月二日条）。これは北垣が新島の大学設立募金運動に積極的に援助していったということの現れです。ここで北垣国道という人物に触れておきます。北垣国道は、但馬国養父郡能座村（現兵庫県養父市）出身で尊皇攘夷運動に参加し、鳥取藩士になります。維新後、明治政府に出仕し北海道開拓事業に従事。その後高知県令を経て一八八一年（明治一四）一月から一八九二年（明治二五）七月まで一年半京都府知事をつとめます。京都府知事時代、琵琶湖疏水事業を完成に導いたほか、民間企業の育成や鴨東開発を行います。前任者の楨村正直府知事と異なり、府会の多数派協調行政を特徴とすると私は考えています。一八九二年北海道庁長官になり、その後貴族院議員、枢密院顧問官など歴任し、晩年は京都で過ごすことになります（北垣については、塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」の「解題」をご覧くださいと思います）。

新島と北垣の接触は、北垣が京都府知事として就任した一八八一年からです。きっかけは、就任直後の北垣が新島を通してアメリカの工学技術、具体的には「破石薬」(ダイナマイト)についての情報を取り入れようとしたことです(『全集』第五卷、一九六頁)。これについて、『新島襄全集』第八卷年譜編は「琵琶湖疏水工事と関連がある、と思われる」と注記していますが(『全集』第八卷、二五六頁)、私は、琵琶湖疏水工事の前に、工事が行われた京都・宮津間車道開鑿工事との関連ではないかと思えます。ともかくも、新島と北垣との親密度は、北垣就任四年後には、先に述べたように自らの息子の教育を新島に托すという段階まで進みます。

② 大学設立募金運動の本格的開始―中央への進出

大学設立募金運動が本格化し、新島が中央の政治家と接触しだすのは、一八八八年(明治二二)です。三月八日、新島は神戸に土倉庄三郎と同道し井上馨と会い、同月一九日には京都で陸奥宗光に会い、運動に賛同を得たようです(『全集』第一卷、二〇〇頁)。井上馨と新島襄との接触は土倉の紹介です。陸奥には新島が書簡を送り、それに対応して陸奥が京都の新島を訪問しています。また、すでによく知られているように同年三月から四月にかけて、東京では、徳富猪一郎が、自己の主宰する『国民之友』に、新島の紹介と私立大学の必要性を訴える文章を載せ、新島の代理として東京に出張していた金森通倫は、五大新聞雑誌社の記者に大学設立のアピールを行います。

この年、四月一六日、新島は東上します。そして、四月二二日、陸奥宗光の斡旋で井上馨邸で、明治専門学校設立に関する集会が開催されます。これには、井上、陸奥、青木周蔵、野村靖、洪沢栄一、原六郎、益田孝、沖守固(神奈川県知事)が出席しました。政財界の大物が並んだわけです。これもよく知られたことですが、この

席上、新島は、脳貧血で席を退くというハプニングがおこります。よっぽどストレスがたまっていたのかどうかともかく倒れます。このことを五月三十一日付で新島は京都の新島八重にあてて手紙を書いています。新島は、自分の体調不良のことが世に知れると、大学設立募金運動に大きな影響を及ぼす、もし自分の病気が重いというふうに見られたら、賛成の人もこれから減っていくだろう、だからなるべく自分の病気を内々のものにしたいたいと、相当に心配をしたようです。この書簡は、新島の切実な想いがよく伝わる、ある種感動的な書簡です（『全集』第5巻、三〇〇頁、第三巻、五八五頁）。

同年七月一九日、大隈重信外務大臣官邸で明治専門学校設立についての相談会が開かれます。新島は、井上から馬車の迎えがあり大隈邸に連れて行かれます。「我力党」からは新島のほかに湯浅治郎・徳富猪一郎・加藤勇次郎が参列します。この会合には、大隈、井上馨、青木周蔵、洪沢栄一、平沼專造、岩崎弥之助、岩崎久弥、益田孝、大倉喜八郎、田中平八が出席するのですが、この会合の参列者も政財界の人物です。新島は、列席の人物から大学設立のための寄付の約束を得るようになります（『全集』第五巻、三五一―五三三頁）。

ところで、この七月一九日の大隈邸での会合はもう一つの意味がありました。結論からいえば、在野の井上馨に対し大隈外務大臣より入閣の要請が行われた場でもあったのです。（同年九月一九日付青木周蔵より陸奥宗光宛書簡、陸奥宗光関係文書）。つまり、表では明治専門学校設立のための相談会、裏では大隈と井上の提携の場です。この提携は成功し、その後七月二三日の黒田清隆総理大臣・大隈・井上の三者会談で井上の入閣が内定し、七月二五日、井上は黒田内閣の農商務大臣になります。

問題は、新島が、七月一九日の大隈外務大臣官邸での会合のもう一つの意味、すなわち井上と大隈の提携交渉を知っていたのか、あるいは新島同席の上でこの提携交渉が行われたのか。新島の書いた文章でそのことをうか

がわたせるものは現在の段階で何もありません。以前、「新島襄と自由民権家の群像」という拙稿を書いたときには、新島襄というのはこの会合の別の意味を知らなかった、おそらく提携交渉は別の部屋でやられたのではないかと考えていました。新島という人は政治オンチの要素があるとも考えていました。

ただ、史料がないので何とも言えないんですが、今は、新島は知っていた可能性もあるなと思っています。新島は、全力で井上と大隈の会合を実現させようとしていました。そのことは、七月一〇日付の新島襄より大隈重信宛書簡でわかります。新島は、この書簡の中で、「両者は）民間ノ教育事業御賛成ノ一点ニ至リテハ毫毛隔異セラル、所ハ有之間敷ト了察」として、教育事業では一致するはずだと述べています。政治的提携のことは一切述べていません。そして、新島は、「御存シノ通小生ノ如キハ巴ニ一身ヲ宗教ト教育トニ委候故、当時公然ト政事上にニ奔走セサルハ深ク理由之有之候訳ニシテ」と述べ、自分は政治で奔走することはない、と述べています（『全集』第三卷、六〇二〜〇三頁）。新島は、七月一九日の会合が、大隈と井上の政治的提携の場であることを知っていたかもしれません。しかし、自分は政治には関与しないという姿勢を新島は持ち続けたと思っています。新島という人は、いろんな政治家との接触があるんです。板垣退助や、大阪にあった立憲政党の人びとのような自由民権運動家、あるいは今日は委しくは申上げませんが、井上馨・陸奥宗光・古沢滋のような自治党人脈の人びともとも接触があります。ただ、絶対に政治には深くコミットしていかなかった。おそらく、「自分は宗教家であり教育者である」というような自己抑制を働かせていたんだと思います。

全国的展開の面では、同年一月七日、全国の主要な新聞、雑誌上に「同志社大学設立の旨意」（徳富蘇峰起草）を発表、全国的に寄付金の募集を訴えたことは御承知の通りです（『全集』第八卷、一七三〜七四頁、第一卷、一三〇〜一四一頁）。

③ 知恩院の会合

もう一度京都での大学設立募金運動の話に移します。

一八八八年（明治二一）四月一二日、洛東知恩院山内の大広間を会場に明治専門学校設立のため大集会が行われます。理事委員・北垣府知事・府会議員・上下京区長・諸会社頭取・戸長・医師、「其外市中の重達たる財産家六百有余名」が参加しました。司会は府会議長田中源太郎です（『全集』第一卷、二二七～二八頁）。注目されるのは、北垣府知事はじめ京都府の書記官、すなわちナンバー2（尾越蕃輔）、ナンバー3（森本後凋）、京都府の課長クラスまで、要するに京都府の官僚上層部が総出で出席しました（『全集』第一卷、二二七～二二八頁）。これは、明らかに北垣の力により開かれた大集会であったと言っていると思います。新島と北垣はこの集会の前に何度も接触しています。そして、この集会の会場は、知恩院側の説明によれば、最初京都府社寺係中川武俊から書面の依頼があり、さらに北垣が大きいかかわった保勝会の会員内貴甚三郎が本山に来て、専門学校設立のため集会するので貸与ありたしと要請により「何心なく貸与の承諾」をしたということです（『全集』第一卷、二二四頁）。知恩院側も、京都府の社寺係から書面の依頼があり、また「名勝・古蹟」・古社寺の保存を目的として一八八一年一〇月に設立された保勝会の内貴甚三郎が直接本山に向いたとすれば、それは会場を貸さざるを得なかったと思います。それとあくまで推測ですが、当時京都の多くの寺院が明治以後の社寺領の処分などで財政的に厳しかった事情もあるかもしれないと思うのですが、これはあくまで推測です。ただ、琵琶湖疏水の分線用として南禅寺の水路閣ができるのがこの年であったことも推測を補強する点です。

この知恩院の席上、新島は「私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ告ク」という演説を行うのですが、その中でおもしろいのは、新島は北垣が進めた京都の振興策、すなわち琵琶湖疏水工事を称賛し、それを進める演説

を行うことです。たとえば、こういうことを言います。

鴨川ノ東ハ巍然タル、大工場、大製造場トナルハ、吾々ノ疑ヲ容レザル所デアリマス

要するに、当初の琵琶湖疏水工事の計画は、大津からひいた琵琶湖疏水の水で南禅寺の北部のあたり、具体的には若王子のあたりで水車群をつくり、その水車を回して動力とし、これをもとにこのあたりを大工場地帯にする、そして京都を一大工業都市にするという計画でした。この計画は、翌一八八九年（明治二二）に水車による動力から、当時の世界の最新技術である電気に切り替ります。この切り替りを推進したのが、アメリカに調査に行っていた田辺朔郎と高木文平です。新島が、演説した時期は、鴨川の東を大工場地帯にするという計画が生き残っていた時代です。もし、この計画がそのまま続いていたならば、新島の墓地のある若王子の景観もだいぶ違っていただろうと思われる。ともあれ、大学設立募金運動の面で重要なことは、新島と北垣はタッグを組んで進み、新島自身も北垣の京都振興策を当然のように受け入れていたということが重要だと思えます。京都の振興のためには、琵琶湖疏水工事とともに大学を設立することが重要だと。そのことを、新島は次のように表現しています。

花ノ都ヲ一変シテ 製造ノ都ト為セ

遊惰ノ都ヲ一変シテ 勉強ノ都ト為セ

IV 新島の北垣への依存—京都での募金運動は順調に進展しなかった—

①京都府下の集金の不調

大学設立募金運動はこのように一見進展しているように見えますが、実は募金の約束を取り付けることと、実際の納金があるかどうかは別の問題です。この点で、新島は、新島はまだまだ北垣に頼らざるを得ませんでした。

一八八八年（明治二二）八月六日付の北垣国道より新島宛の書簡では、「根本地タル京都は未タ著シキ功ヲ見ス」（『全集』第九卷（上）四二四頁）と書かれています。

また、一八八九年（明治二二）一月一七日、神戸から発信した新島より北垣宛書簡では、神戸での募金運動がうまくいっていない様子が書かれています。すなわち、新島は兵庫県庁で内海忠勝兵庫県知事に面会しますが、内海から京都府の豪家もまとめきれしていない、京都の手本を示せと冷淡に拒否されます（『全集』第四卷、一七頁）。内海の言うのも一理ありまして、京都では千円以上の寄付申出者は浜岡光哲のみです。後はそれ以下で、京都では一円とか小口の応募者がともかく圧倒的に多かったです。

ところで、前に言ったように、募金の約束があったとしても、実際にその金が支払われたかはわかりません。同志社社史資料室には、「同志社大学義捐者姓名簿」という史料が所蔵されています（同種のものが九冊あります）。この史料には、寄付申出額と納金の有無が書いていると思われる「領収済」^②、^③の印がある簿冊があります。「領収済」は寄付申出額を全額納金したと思われませんが、^④は全額納金を示すものかは確定できません。^⑤は簿冊の点検を意味するのではないかと思われます。写真¹を見ていただきたいのですが、例えば、田中源太郎の名前が出てきますが、「三百五拾円」は募金を約束した金額です。この字の上には^⑥とありますが、三五〇円を一

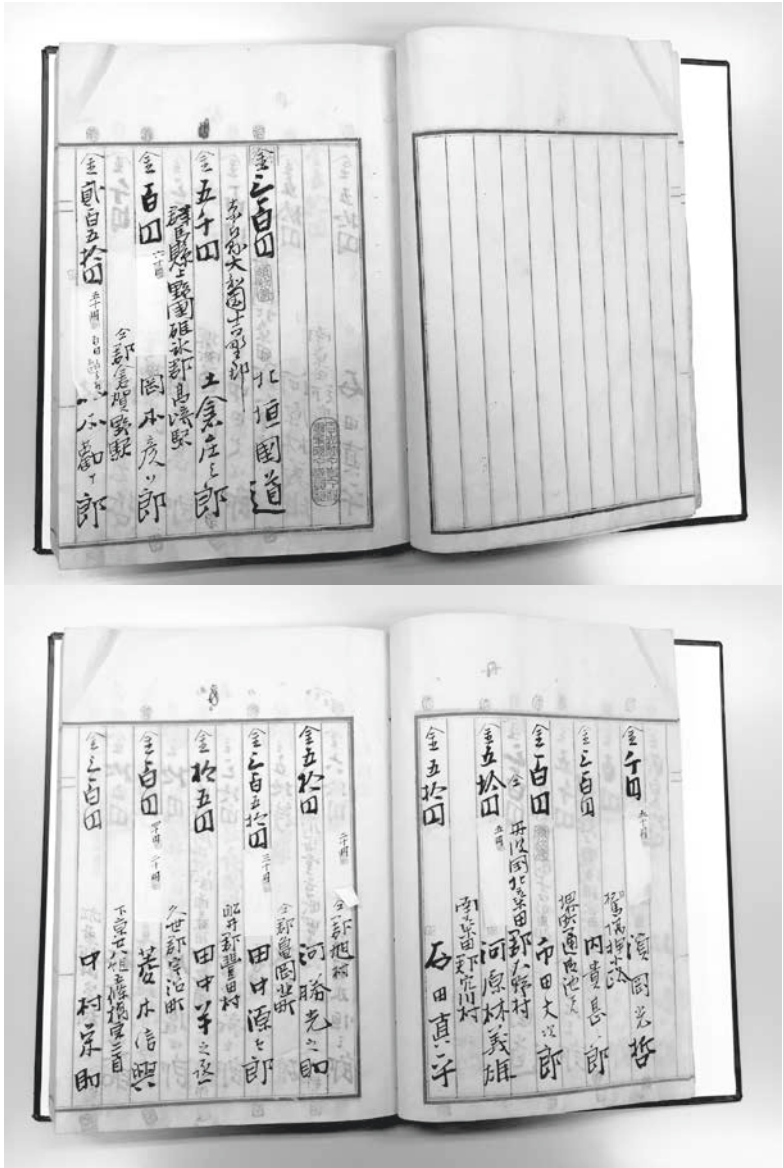


写真1

挙に払ったわけではなく、「三百五十円」の下に小さな字で「三十円」とあって、そこにも⑨があります。結局のところ、私はこう解釈しています。田中源太郎は三五〇円の募金を約束した。その内、この名簿ができた時には実際に払った額は三〇円であったと。この名簿には一二一五名（団体含む）の記載がありますが、「京都府庁」関係者の寄付申出者二一六名には北垣国道の三〇〇円が「領収済」以外に、誰ひとり「領収済」のサインはなくすべて⑩のみです。この⑩は、さきほど申し上げましたように、実際払ったかどうかかわからない、むしろ約束しただけでも実際は払っていない⑪ではないかと考えています。結局納金が実際にどの程度行われたのか確定はできません。なおこの名簿を見た時、京都府下で募金を誰が約束しなかったかも興味がわきます。完全に募金を約束しなかったか正確にはわかりませんが、「同志社大学義捐者姓名簿」を見る限り、京都府下の有名人では、尾越蕃輔（京都府ナンバー2のこの人物は、一八八八年四月一二日、洛東知恩院の会合にはいたはずです）溝口市次郎、植島幹、畑道名、中安信三郎、富田半兵衛、飯田新七などの記載がないのが気にかかります。溝口・植島・中安などはアンチ北垣の姿勢をとっていた人物です。京都市中において室町商人などがどの程度寄付申出があったかも検討する必要があると思います。

さて、募金を約束しながら、実際ほどの程度の金額が集まっていたかがわかる史料がないかということですが、実は今回の展示で格好の史料がありました。図録『はじまりの地』では、五五頁にその史料が載っています。同志社大学事務所用箋に書かれたこの史料を翻刻すると、次のようになります。

①〔欄外〕明治廿二年十二月卅一日

義捐金之事

一、金五万九千八百七拾七円六拾八錢九厘

内

金參万九千七百七拾八円七拾貳錢貳厘

現金収入高

金五拾七円也

予約者死亡或ハ違約等ノ分

金貳百六拾四円也

広告違及帳簿重複

金貳万〇三百七拾七円九拾八錢七厘

未納金高

②〔欄外〕明治廿三年十月十日

一 翰啓呈仕候、陳ハ去ル十七年三月ヨリ昨年中ニ係ル会計實際報告書ヲ製、賢覽ニ供候条、披閱之上ハ金森氏へも御送示被降度奉希望候、余事ハ后便え残シ、右得貴意度如斯御座候

艸々 拜具

京都

廣瀬源三郎（印）

大磯ニテ

新島襄先生

まず、②について申し上げます。この年月日は、「明治廿三年十月十日」と書いていますが、「十月十日」は明確に誤りです。封筒は「一月十日」になっていきますので、これは、「二月十日」が正しいと思います。新島襄が大磯で亡くなるのはこの年の一月二三日ですから、「十月十日」ですと、新島が亡くなってだいぶ経ってからこ

の手紙が出されたことになります。では、②は何を書いてあるかというと、新島に対し、大学創立事務の書記をつとめていた廣瀬源三郎が、一八八四年（明治一七）三月から一八八九年（明治二二）一二月までの「会計實際報告書」を送るのでそれをご覧いただき、金森通倫氏にもそれを見せてくれと言っているわけです。

その会計報告が①です。大学設立の義捐金申出が五万九八七七円余、その内訳は現金収入が三万九一七八円余で、これが実際にある金です。この割合は約六五パーセントです。「予約者死亡或ハ違約等ノ分」と「広告違及帳簿重複」を除き、未納金額は二万三七七円余になります。この割合は、約三四パーセントになります。つまり、申し出た義捐金の約三四パーセントは実際同志社には届いていなかったことになります。新島襄はこの後すぐに亡くなりますが、その後これらの会計処理がどのようになされていくか、まだ研究がないと思われます。ともかく、わからないことがいっぱいあると思っています。

②北垣への依存度の増大

ともかく、募金運動が大きく拡がらない、募金の約束はあっても実際は金が集まらない。これは新島にとって大きな悩みだったと思います。そのため、新島は北垣を頼り続けます。

その一つは、横浜正金銀行頭取の原六郎の問題でした。原は以前に六、〇〇〇円の募金を約束していましたが、一向にその金を渡す気配はありませんでした。そのため、新島は、北垣、井上馨、渋沢栄一に原との調整を要請していくことになりました（『全集』第四卷、一四八頁、一七一頁、第五卷、三九六頁）。

また、一八八九年（明治二二）になっても他府県での募金活動は順調に進展しませんでした。病勢の進行もあつてか、新島の北垣への依存はより露骨になっていきます。さきほども触れた一月一七日、神戸から発信した新島

より北垣宛書簡（『全集』第四卷、一七頁）では次のように北垣に哀願しています。自分には種々熟考しても名案はなく、京阪神の有力者を取りまとめるために、何とか「閣下特殊之御工夫」をいただけないか。

さらに、二月六日、新島より地方官会議出席のため東京滞在中の北垣宛書簡（『全集』第四卷、三九～四〇頁）では、北垣に対し、他府県知事への周旋を依頼します。

新島は明らかに北垣を頼りにしていました。したがって、新島は、大学設立運動に関する情報をほとんど選ぶことなく、むしろ同一志向の人物として北垣に伝えていた感があります。そして、北垣も、それに呼応し、政府頭官や地方官への添書をほとんどためらいなく書いていた形跡があります。

北垣自身も運動員の様相を呈していました。一八八九九年（明治二二）一〇月二九日の北垣の日記（『塵海』明治二二年一〇月二九日条）には、東上していた北垣が三井銀行の西村虎四郎に会い、西村に三井一党の寄付を承諾させたことが記されています。

では、北垣ら京都府政界の人々はなぜ新島襄の大学設立運動を支援したのかについても触れておきたいと思えます。

まず、これはどなたでも指摘していることですが、関西最初の高等教育機関である私立大学の魅力だと思えます。当時、大学は官立の東京大学（一八七七年成立、一八八一年法・理・文・医の統一的四学部制大学、一八八六年東京帝国大学）しかなかったわけです。北垣の場合、とくに京都の振興のために理化学教育に期待をかけていたと思われる。それは、北垣が三井銀行の西村虎四郎に会った際、「同志社大学設立ノ事業、理化学両科ハ尤モ我国發達ノ要具ナルニ、既ニ其事業諸学科ノ内此ニ科教室建築ニ着手セリ。此科業ハ京都工商業上ニ於テ最大ノ關係ヲ有スル有益緊要ノ者」と言っていることとわかるとおもいます。なお、北垣は西洋文明、とりわけ西

洋科学技術の導入に熱心でした（琵琶湖疏水の水力利用を当時における世界の最新技術である電気を導入することを決断）。また北垣は西洋文明に伴ってキリスト教が入ってくるのは当然と考えており、キリスト教に対してまったく抵抗感を持っていなかっただけでなく、一部では、「耶穌教」心酔者とみられていました（拙稿「新島襄と北垣国道」）。

VI 新島襄という人物のおもしろさ

最後に主観的な話をします。私は、新島襄を好きです。何が一番好きかというと、金を集める姿勢です。私の場合、新島の理念とかそういうものに魅力を感じたわけではありません。そういうことよりも、金集めのときに全身全霊をかけて、なりふり構わずにやる。北垣にすぎりつく。その姿勢が魅力的です。そうでいながら、政治とはいつでも一線を画しています。これは、井上馨、陸奥宗光、大隈重信あるいは自由民権運動家に対してでもそうです。彼らと付き合っていますが、政治とは一線を画している。やはり、教育者だと思います。

なお、新島と自由民権運動および自由民権運動家について一言触れておきたいと思います。二〇〇五年に刊行された太田雄三氏の『新島襄』という本では、「新島は自由民権運動に伴った思想的傾向に概して敵意と警戒の念を持った」「欧化時代の風潮に乗じて国家権力に頼ってキリスト教を広めることを考えていたように見える新島が、どこまで本当に自由というものを尊重する人間だったか疑わしく思われる」（三〇五〜三〇六頁）と、書いています。しかし、自由民権運動と言ってもいろいろあります。新島の思想的傾向は明確です。新島は、板垣退助や立憲政党に連なる人びとには親近感を寄せていたし、人的関係も持っていました。しかし、民権運動でも

「過激」な壮士の民権についてはそれを是としてはいなかったということだと私は考えています（『全集』第一巻、四五〇～四五二頁、四五四頁）。この点はさまざまなところから証明できると思います。

また、新島という人の性格はどうなのかなと考えた時に、これがぴつたりだと思った表現がありました。次の中村栄助の新島評です。

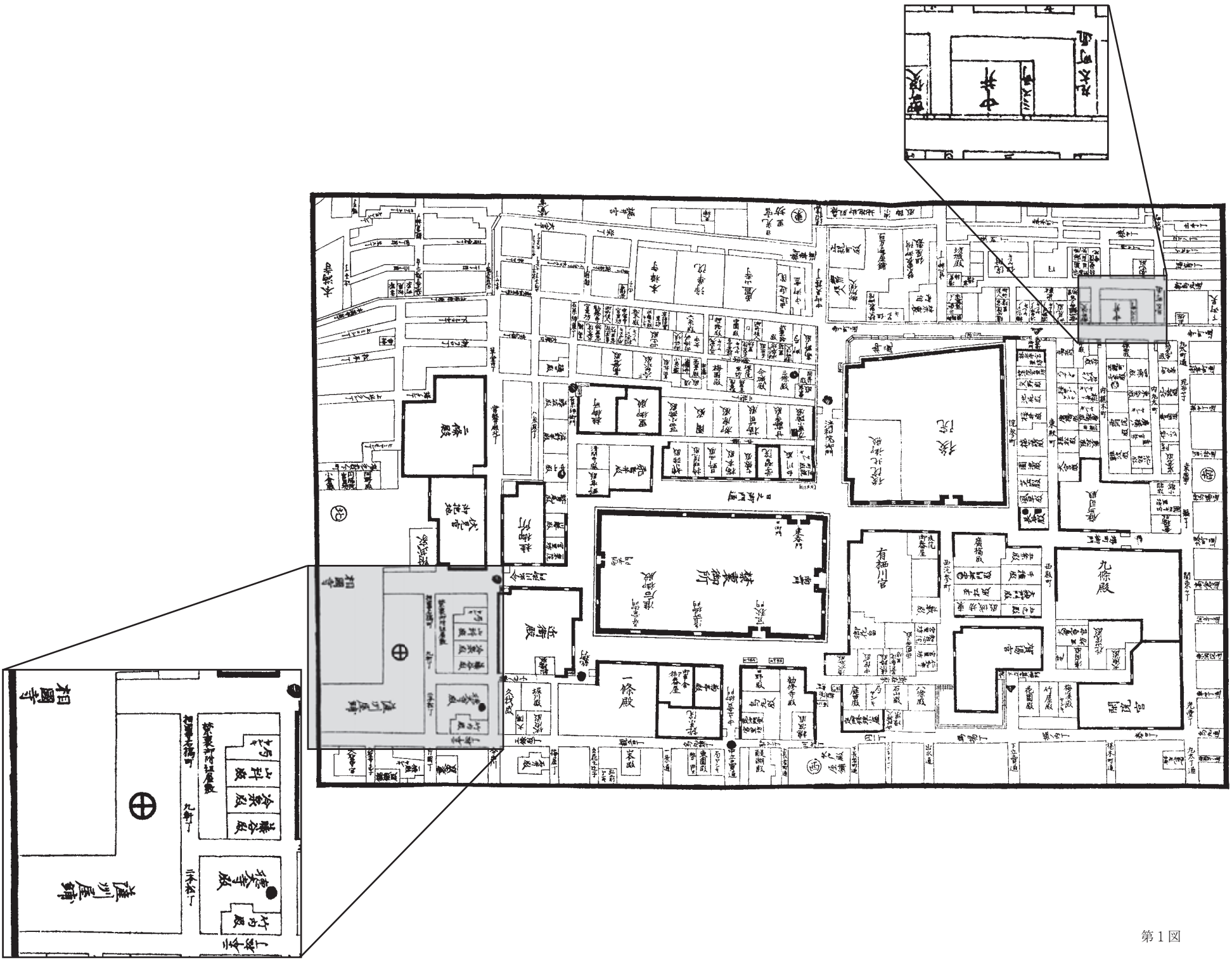
私が初めて会った此の紳士の印象は、私の頭に深く刻まれた。其顔は蒼白いほうで、濃厚な眉毛と髭、左眉の上に残る傷痕、飽くまで黒く澄んだ瞳、何処となく一種の威厳が具わつてゐる。紳士は何ちらかといへば、言葉数の少ないほうであつた。しかも、語る一言一語には、心からの真実が籠つてゐることが感じられる。そこには決して偽りも飾りも発見することができない。それに、優しくて人なつこいところがあつて、人を惹きつける或る不思議な魅力をもつてゐる人物だ。

（森中章光編、中村栄助述『九拾年』三八頁、傍線高久）

中村のいみじくも表現した「優しくて人なつこい」。新島と接し、「人なつっこさ」でいつのまにか魅了された人間が結構いたんだろうなという気がしています。あれほど、非キリスト者で慎重で警戒心の強い田中源太郎もその一人だと思えます。いい意味での、もって生まれた「人たらし」の素質は、この大学設立募金運動で充分に発揮されたと思います。まだまだ言わなければならぬことがいっぱいありますけれども、もう時間も過ぎましたので、私のつたない話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(追記)

この講演記録をまとめるため、一月に同志社大学社史資料室を訪れた際、布施智子氏より「京都府下（予約申入）大学資金寄附未納者姓名録」なる簿冊を見せていただいた。私は、二〇〇二年に、同志社大学人文科学研究所「キリスト教社会問題研究会」で「同志社大学義捐者姓名簿」九冊を分析した報告（『明治専門学校（同志社大学）義捐金名簿について（一）』）を行ったことがあるが、その時はうかつにも「京都府下（予約申入）大学資金寄附未納者姓名録」という簿冊を見過ごしていたようである。この簿冊の分析は他日を期さなければならぬが、表面的に気付いたことを記しておきたい。第一に、この簿冊は募金を約束しながらもまったくお金を納金していない人だけではなく、一部納金した人名も書いている。第二に、この簿冊がいつ作成されたかは記載がないので不明である。したがって、この簿冊が作成されたあとに納金した人がいる可能性は捨てきれない。第三に、この簿冊で姓名が記載しているのが五一七名である。二〇〇二年に報告したレジメを見る限りであるが、京都府下で募金を約束した人名は六二二名であるので、一〇五名は募金完納で約一七パーセント弱である。別の言い方をすれば八三パーセント強はまだ募金完納されていないということになる。第四に、この名簿には京都府庁関係者が二二六名が記載されており、その内一名だけが一部納金しているだけで、二一五名はこの名簿の時点で一銭たりとも納金されていない。府知事北垣国道は諸種の史料により三〇〇円を「即納」したことは判明しており、北垣以外の京都府官僚は、それほどこの運動に熱心でなかった可能性もある。そうすると、逆に北垣の熱意が際立つことになるのだが、ともあれ、数の把握の正確さも含めて、この問題は他日を期さなければならない。



〇平政史
 □千冬史
 〇六門右 中之命等の請和院内
 〇六門左 今本川内 協所内
 〇九門右 乾 乾 乾 乾
 〇九門左 上老等所内
 〇三門右 協所内 上老等所内
 〇三門左 協所内 上老等所内

第 1 図